

茎葉処理除草剤を用いた営農再開前のヨシ対策

福島県農業総合センター 浜地域農業再生研究センター

事業名 福島県営農再開支援事業

小事業名 地域課題解決展示ほによる営農再開支援

研究課題名 除染後農地におけるヨシの除草実証(飯舘村)

担当者 松木伸浩・根本知明

I 実証技術の解説

1 要旨

除染後農地にヨシが繁茂するほ場が見られ、営農再開前にヨシの除草対策が必要となっている。茎葉処理除草剤の散布適期は、作業性の点から 5～6 月上旬であり、除草効果も高い。処理後に新たな萌芽が確認された場合は、追加のスポット処理を実施する。

- (1) ヨシの萌芽は 4 月上旬に確認され、5 月中旬の草丈は 40cm 程度、6 月上旬には 1m を超えていた。8 月上旬には 2m を超え、下旬に出穂した(図1)。作業性の点から、草丈があまり高くない 5 月～6 月上旬が散布適期と考えられた。
- (2) 茎葉処理除草剤散布後、1 か月後に葉身が枯れ、4 か月後に地上部が全て枯死した(図 2、表 1)。
- (3) 処理後の新たな萌芽は、2 か月後以降に確認された。6 月処理 1 回で新たな萌芽が確認されなかったケースもあった(表2)。
- (4) 処理後に萌芽した茎葉は、8 月の茎葉処理除草剤の追加散布により 9 月下旬に枯死し、新たな萌芽は確認されなかった(表 2)。

2 期待される効果

- (1) 営農再開前のヨシ対策に活用できる。

3 活用上の留意点

- (1) 茎葉処理除草剤はグリホサートカリウム塩液剤(有効成分:グリホサートカリウム塩 48.0%、休耕田での使用回数:3 回以内)を用い、薬量 1000ml/10a、散布液量 25L/10a 散布した結果である。
- (2) 6 月中旬以降に除草剤の散布を実施する際は、散布液量を登録上限の 100L/10a とする、あるいは機械除草を行った後、新たに萌芽するヨシを対象に茎葉処理除草剤を散布する。
- (3) 除草剤を使用する際は、農薬の登録内容を確認し、飛散防止対策を徹底する。

II 具体的データ等



図1 ヨシの生育（飯舘村草野）



図2 茎葉処理除草剤散布後のヨシ

表1 茎葉処理除草剤散布後の生存茎数

処理区		5/11	処理4か月後
5月処理 (5/11)	1	4,800	0
	2	4,300	0
6月処理 (6/5)	3	2,500	0
	4	4,800	0

注1 生存茎数: 茎葉が緑色を呈している茎数。

注2 除草剤: グリホサートカリウム塩液剤(薬量1000ml/10a、散布液量:25L/10a)。

注3 ()内は処理日、各処理1a×2カ所。

表2 茎葉処理除草剤散布後に萌芽したヨシ茎数(本/1a)

処理区		6/5	7/3	8/25	9/22
5月処理 (5/11)	1	0	9	8	13
	2	0	4	25	17
6月処理 (6/5)	3	—	0	15	18
	4	—	0	0	0
6月+8月処理 (6/5、8/25)	5	—	0	10	0
	6	—	0	4	0

注1 除草剤: グリホサートカリウム塩液剤(薬量1000ml/10a、散布液量:25L/10a)。

注2 ()内は処理日、各処理1a×2カ所。

III その他

1 執筆者

松木伸浩

2 実施期間

平成29年度

3 主な参考文献・資料

- (1) ミズバショウに対するヨシの刈り取り効果: いもり池における実験の報告(新潟応用地質研究会誌, 58, 31-38, 2002)